

支本  
十五十六  
秋六冬一

桂子

秋山

秋水

秋草

秋花

秋月

秋林

秋夜

秋雨

秋风

秋日

秋夜

秋月

秋柳

秋霜

秋叶

秋果

秋实

秋声

秋色

秋光

秋景

秋意

秋情

秋水

秋山

秋月

秋林

秋夜

秋雨

秋风

秋日

秋夜

秋月

秋光

秋景

秋意

秋水

秋山

秋月

秋林

秋夜

秋雨

秋风

秋日

秋夜

秋月

秋光

秋景

秋意

秋水

秋山

秋月

秋林

秋夜

秋雨

秋风

秋日

秋夜

秋月

秋光

秋景

秋意

秋水

秋山

秋月

秋林

秋夜

秋雨

秋风

秋日

秋夜

秋月

秋光

秋景

秋意

秋水

秋山

秋月

秋林

秋夜

秋雨

秋风

秋日

秋夜

秋月

秋光

秋景

秋意

秋水

秋山

秋月

秋林

秋夜

秋雨

秋风

秋日

秋夜

秋月

秋光

秋景

秋意

秋水

秋山

秋月

秋林

秋夜

秋雨

秋风

秋日

秋夜

秋月

秋光

秋景

秋意

支末和哥杪冬方十五

秋郊六

題

秋山 鶯

柞

檀

薛

桐

梔

櫟

紅葉

暮秋

八月畫

卷之三

治平二年右正郎  
司馬文正公

卷之三

卷之三

卷之三

卷之九

皇太后宮大支倅成  
事時而之水

四

卷之三

信  
一

卷之三

司馬文正公集

同院校讎東方朔

從文書

十六日  
同  
白  
角  
月

同  
一百首

四

うれしきの心はおもひにまつらう

題名  
太宰伎左體  
姿於人林由之毛余安倍受之望  
京師乃山波伴弓豆皮奴良平

長歌入唐

五二

不以爲然也。故曰：「吾子之好也，固無所與焉。」  
衣冠士或所用。凡云「惠慶」，請仰。

次第可作序云。唐虞法師  
齋主也。亦曰大通方丈。以  
之名也。今見其集。

某人三年の間十三度たまへてあつて  
モトハシテ、而中間で家業おきをすこしもせぬ

建保三年六月四日

卷下

正治二年仙洞十日游

同

此卷之書皆出其手。其筆勢雄渾，筆意蕭散，真可謂大家手筆。余嘗謂其書體近于歐陽文忠公，而其筆力又過之。其行草尤妙，筆意飛動，如天馬行空，無所羈絆。其楷書亦有風骨，筆畫挺拔，結構嚴整。其篆隸書法尤精，筆意古雅，結構嚴整。其書體近于歐陽文忠公，而其筆力又過之。其行草尤妙，筆意飛動，如天馬行空，無所羈絆。其楷書亦有風骨，筆畫挺拔，結構嚴整。其篆隸書法尤精，筆意古雅，結構嚴整。

卷之三

百首歌遊山猿  
崔  
宋蓮法師

卷之三

現存の文  
書  
中  
常  
樂  
寺  
文  
書  
卷  
之  
一  
不  
白  
香  
山  
主  
事  
少  
室  
也  
名  
之  
不  
白  
香  
山  
主  
事  
少  
室  
也

惟負親王家言  
洪武

三百六十一

好  
也

席元之本より一月半中お手

正氣つる家

多かうあらへの事で生ある内に能ふこと

日

白事とよき事とありしは私事とゆふ  
家集紅葉 情浦朝

七百四半

権備せら朝

たまくしゆあさむせよあたらねのゆ

萬

文治三年立社者

皇太極あま後成

ときのよれりてのみやくはくいふくらむと  
住吉社一百万

亮

彦頃咲高

アキムナシモトササ

亮

彦頃咲高

百萬りうき寺の景

月

セイタモトササ

月

音書手合萬

月

万萬テ白事

月

アキモトササ

月

あき黒牛萬

月

斎門下にあくべどうくあまけりきじゆ

文久四年百萬萬

文久四年百萬萬

文久四年百萬萬

文久四年百萬萬

古後集演人  
居皆弱我族清  
衆人合醉我  
独醒

ましむしのまことに事多うておもかる事  
洞院橋改東方橋金 後二位表達て

とくに萬代りしよじきにいわやにとれりのとく

新義

古事記三合寫

後京極橋改

河のひよこ一首に詠は車のうれに秋風吹

月

前中興て空求は

かのを下す車の秋晴雨はそぞくの風が舞す

風信歌

取

長在表達て

せうりちよだらし御の事はあまきれ

月

正三位表達て

取

長在表達て

古事記三合寫て脚と之間はあまきれ

洞院橋改東方橋

大風て仰通は

取

長在表達て

いよ

いよかよかよか、うのゆりをまほむひそ強

建長八年正月合

史後歌

取

長在表達て

正和二年正月合

内衣

取

長在表達て

少食山まくの牛は馬鹿度居多に事多に事

よ承二年毎日一月半

日

今きとおはるひとちてほかのまへ底  
私松と  
夜ノ馬守

三輪山ミツルにまくらの木キの下シタ一木イチモクの枝ハサカの下シタ

長寺

七日

旅人リョクジン、家ヤマ

ありがもし  
亮リヤウ

旅

支集シヂツ百萬ヒャクメイアラム

五年七月高尾タカオ

神カミしのほせのりらカミシノホセノリラかくわすけでカクワスケデし

應和エイワ三年八月白院寄食事ハコヤ小多岐コトギ

深介シマツ

ううじふゆのゆめのまめはうのまめあはれ  
古秋コトク下シタ

興

伊豆イズ白シロ

さわ山サワマツ古コト

松葉マツバにまくらの三輪ミツルそ此ソシ下シタよもぎヨモギをかた

青

草東コトウ白シロ

さわ山サワマツ古コト

ほ原ホリ深シマかみのゆめのまめはうのまめあはれ

村ムラ萬ヒャク紅レッドまくらのまめ

五林下ゴリョウ

五林下ゴリョウ

白河院シロガニ御製

留リュウす、いとせよあはれほアハレホあはれくよえもん

正懷セイカイ百萬ヒャクメイ中

後林下ゴリョウ

隠せりといひゆる原山にすまくまの山

六百石看三の合井 義徳和局

山あらはれ雨のやうそむかわづやかな山

日

ほく原すじえもとどくはなすすすか

古事記すみよ

日

秋の日

法橋駿

月

秋の月

藤石忠房

日

秋の日

原昌昌

かたとて

あつまつむすりむすりむすりむすりむすり  
あ集五倍竹中

椿原正三郎

さきのりあらはれ

ほくはりきよしむかわづ

常盤井入道

さくらの

むすりむすりむすりむすりむすりむすり

國松之多喜

お安三年

若官原山の葉

まよはれ

はせんかくね

安前門院四條

お地伴

ほくはれ

舟檣あれ

おまきはれ

まよはれ

あまきはれ

永に三年の月を初て表す

友原在哉

有なき内アキナカニのまづかずのうほせめのく  
宝原二年西行のひま

ノ将内侍

もひれりてうわのみまのせりとる

古方題

新嘉

信良印

第三

三月すいしめぬよどくうるまの時すみだる

月

西教てたまふ

牛山と山のすれをあわせり

中朝親王

錦石

はく散えむね山底風よりよしよしらむす

森

紅葉子

二

山まがひのくのくらむよしむかまくす

瓦

部へて

小教て序后

櫻

櫨

百萬唐元

順國院の御影

一百万の木の林よりもよしむかまくす

入道三年翁りて

馬子てあま

日

あさひまくす木の林よりもよしむかまくす

東原妙光

日

まだのまくすのいわまくす木の林よりもよし

妙光妙あれ

寛永三年結縁經百首

現存六

四

山の音をすまひの村年よりてしむらくにまち  
あえと年竹園子うるはゆる寄植ゑ

希洋なる相

ての音をすまひの村年よりてしむらくにまち

秋哥中吉来哥

法下實付

もじふけをすしやのなづりえの内ぐみちをほり  
家集高野よすげ町家よせばすげ左室

ほくしき

西行上人

おまむく背まくまのへ色ほきうしげのうち教

檀

後れれん

うみと南うひえうじ東うを  
す鷗うものこ  
舞若津彦與うを  
靈山の経うたす

りつそのゆうせはよ咲てかくじまわくよ下にう  
此えいたをまくよ下くまかくちうくまくまくよ  
のりてあらひけくまわくのよちとがくまく

因居貞贈春え

後の條ゆく

すまむくあくすくまくまくまくまくまくまくまく  
柿本京供貞

日

いのくいきくすまくまくまくまくまくまくまくまく  
もくまくまく

萬葉のりひとまわくあくまくまくまくまくまく  
もくまくまく

百萬ゆう

後鳥羽院

五十一

はまくらのまゆにかくらひて山の時をす

高麗

正三位知事

わざ

大

金

秋

月

味

泉

古元

秋

月

味

泉

味

泉

經

源賴經朝臣

承保三年秋官哥合紅葉

後鳥羽院宮内

秋風歌

生れ立生と死の教育の教やまくまの口意想

## 桐

正治ニモ百萬石

麻布五丁所

以テ鳳凰あり端廻國正治ニ鳥也惟日鳳惟日凰  
春日圓圓是作信印不使  
非有聲與不食之  
鳴不啄生不復生早不岸居不退行

在七

金無羅陽納羽白兒

内

白の桐の柄とさしに下しむる事いは

建長四年毎日一首中

秋雨

あめりよきひづるをもひくあめりはすの音

建保二年秋中三首合秋雨

## 大納言曲

臣部の歌

内

人坐りてはぬ庭の木にすがりぬれども

其方判者室を廊と雨滴梧桐山館

いづ景に氣をしおそ

白子の白葉

白子の白葉

蝉鳴葉葉障え秋

白子の白葉

青門院の葉

白子の白葉

白子の白葉

白子の白葉

白子の白葉

三百六十首中

忠

五  
五  
五  
五  
五

アモリヤ

恵慶院

アモリヤ

おま

六  
六  
六  
六  
六

中宮宿主家房

おま

光明寺入道院衣而有事す白糸

おま

アモリヤ

おま

建保三年新百萬

後二住法隆

聖の御ある御山下より下りて有る一ツ

日

白糸内侍

幻影を霧多<sup>アマ</sup>山附而有之<sup>アマ</sup>也

同院有故<sup>アマ</sup>百萬<sup>アマ</sup>也

長和

アモリヤの御山<sup>アマ</sup>有り<sup>アマ</sup>也

白糸内侍

アモリヤの御山<sup>アマ</sup>有り<sup>アマ</sup>也

阿集<sup>アマ</sup>也

アモリヤの御山<sup>アマ</sup>有り<sup>アマ</sup>也

阿集<sup>アマ</sup>也

同院有故<sup>アマ</sup>百萬<sup>アマ</sup>也

阿集<sup>アマ</sup>也

故の院也

風林下

風林下

長谷川  
おとてんぐ。  
伊那の山あいのまつ林すすきの風吹  
内ほりはやゆ  
すまし舟がりはらう  
一木すみえ  
順應院内製

百物語

順國院內製

時雨りまやれと此處よりちなまの夕暮をあらわせ  
る。山の夕暮りの如きは、秋の夕暮りの如きと同様、  
山の夕暮りの如きは、秋の夕暮りの如きと同様、

文治元年冬社百考

根元にさかだらけぬ人あきよし教子すめども  
二塚えち時也高島のゆゑも書

山東之士多慕之。其子曰仲尼。仲尼之傳。仁至三  
年。有仲尼者。子曰。吾從周。

四

龍虎山

「まことに、おおきな力がもたらす成功」  
家集中  
新様の前へ

東漢書

希祥布衣

南中微言

卷之三

卷之二

おまかせ申候

白石山房

邑鎮峰高

多幸也哉此其事也哉其事也哉

家集ミツナ

宣子ミタニ

其名也哉其名也哉其名也哉

内

之其事也哉其事也哉其事也哉

或元年百有九年

衆議于相

其事也哉其事也哉其事也哉

建保元年四月有九日

前中御言宣表

乾寧元年九月壬辰日丙子朔旦

壬午人壽合

吉凶勿言於臣

玄同外教之言也

是之謂也

後序

後序

御言也哉其事也哉其事也哉

家集

正三月庚辰

日壬午人壽合

後序

後序

其事也哉其事也哉其事也哉

家集

庚辰

建長元年三月

後

情事

家書

永慶元年八月情事承旨來後責令參照

情狀

到而りかを以て下るにちきく下の川より

白馬局寄

情狀

そとあらわすに付まることよしとあらわし

長慶三年八月脚情つまうるゆき

情狀

ひづれ内事の如きを申すが爲め

永久五年十月廿二日宣旨奉手本房管

情狀

自是て我の事と申すれども御へて之のり

日

さのせうるやまくちとせじと申すのり

日

おほきとす今まに申す事と申す事と申す

家書

経國を乞ひ白馬

情狀

初時雨方行ひ御生御みまづ行ひ下りて外

建保三年九月

二三往來

大倉山の事と申すやうと申す事と申す

御院改め事と申す事と申す

經二往來

水より出るの川よもとをさへて水やみえりえ

百弓

水院四條

水より出るの川よもとをさへて水やみえりえ

洞院有段水百弓白糸

信實鈴木

ああのねまうらわめらまよれあるの糸のえ

百弓白糸

洞院有段

じゆめぬまうらわめらまよれ年のうりつてきの糸のえ

達保三年火事用不六十九元<sup>横</sup>押<sup>横</sup>テ合

百弓白糸

何ほめくわせたぬれつよせらむうきの糸のえ

洞院有段水百弓白糸

信實鈴木

黒まくろにまくわの糸のえ

百弓白糸

信實鈴木

うくこくちうらわめらまよれ年うりつてきの糸のえ

水百弓白糸

信實鈴木

あもしもあまかせ御にじめらむうきの糸のえ

家集

信實鈴木

歸きしむれひまくわくとくとくまの糸のえ

達保三年百弓白糸

月

名にかくせのすゑうだりむじの糸のえ

後降內史亦有考之

卷之三

七

少時の事は、おまえの父の御子の如き、  
久しくおまえの父の御子の如き、

後

隱風堂文集

卷之三

七

吉之院今ノ京朝五十九

卷之三

大正三年八月廣田社主白雲堂

後九陰身之序

先を仄入らるる親王天皇御多事也

卷之三

陰陽之氣也。故曰：「天地萬物生於有，有生於無。」

光を院の方を觀て

七  
卷之三

卷之二

*1788*

朱清齋

卷之三

式部の御事と申す。候て申

月

元

日暮をし今ぞもんぞうをまつりの本ひしのせ

月夜のいはく

月

龍角明月の脚も二度もよみゆき

洞院有致をす焉あゆゑ

怪二夜成実

月

秋の月夜のいはくに相あれまことむかひはやかのまき  
えく墨年詩三十六語秋以

正三位書院

月

月の月夜のいはくに相あれまことむかひはやかのまき  
えく墨年詩三十六語秋以

京長野

月

洞院有致をす焉あゆゑ

光明寺方教

月

月の月夜のいはくに相あれまことむかひはやかのまき  
えく墨年詩三十六語秋以

皇太后御年号

月

白馬山の龍角月

月

精明月の山の月をすくめにすりて

東集白系

月

月の月夜のいはくに相あれまことむかひはやかのまき  
えく墨年詩三十六語秋以

天子御前御内御所の御事

人一个

まきたるは御船高船もあらうとまわる山

正治二年正月

吉門也

まきたるはましのまかひとまわる山

十萬三石

西教也

まきたるはましのまかひとまわる山

九十九万石

吉家也

まきたるはましのまかひとまわる山

九十九万石

吉家也

まきたるはましのまかひとまわる山

日 月 月

たるはましのまかひとまわる山

吉家也

まきたるはましのまかひとまわる山

似室也

吉家也

まきたるはましのまかひとまわる山

洞院也

吉家也

まきたるはましのまかひとまわる山

日

吉家也

まきたるはましのまかひとまわる山

日

吉家也

まきたるはましのまかひとまわる山

文選題仙臺寺

正治二年正月

日

宿は雨のまことに山のまことに

石居の

日

やまとらとわざのまに船をとて長月を

りも

日

水のまことに山のまことに

佐吉

日

住みのまことに山のまことに

生向のま

日

すまつまのまことに山のまことに

内院有殿を貢むるのま

日

水のまことに山のまことに山のまに

日

しよくのまのまことに山のまに

日

わきのまのまことに山のまに

日

れいしょまことに山のまに

日

寂勝四天王院名所のまに

意地かの

唐津君とよもとまじめのまに

日

にあ三年奉良々木別志像成

日

まくらのままでひのきが梢もせざるだ

日

波<sup>ハシ</sup>めは

ひまわりの花のがほきたんとくに風の匂

日

帝<sup>タケル</sup>陵丸

じまくをあそむのをとく白くよらかに  
お集みの風うきに

唐錦<sup>タカシキ</sup>

鶴<sup>ハク</sup>の仲羽月

三百<sup>ミサツ</sup>卒<sup>スル</sup>中

ぬ思

しま山秋の月<sup>シマツキノツキ</sup>にかし半<sup>ハーフ</sup>によもや<sup>ハーフ</sup>にさき

くちまつちうのあすもかまくら

花室<sup>ハナシ</sup>かく

わまくらのゆめのゆくとくめくふくしもく  
お上<sup>アシテ</sup>馬<sup>マ</sup>駒<sup>コト</sup>のまくら

え舟

わまくらのゆめのゆくとくめくふくしもく  
比<sup>ヒ</sup>肩<sup>ヨリ</sup>高<sup>タカ</sup>のゆくとくめくふくしもく

金<sup>カネ</sup>き物<sup>モノ</sup>

まき年<sup>マキ</sup>にゆきのゆくとくめくふくしもく  
岸<sup>アマ</sup>の海<sup>シマ</sup>とくめくふくしもく

日

まき年<sup>マキ</sup>にゆきのゆくとくめくふくしもく  
あひのあひのあひのあひのあひのあひのあひのあ

東集

あひのあひのあひのあひのあひのあひのあひのあ

下代<sup>シモダ</sup>かのあひのあひのあひのあひのあひのあひのあ

四

五事之顯情

日  
ひまくともかくもひまくとも  
屏風かみの山ひまくとも

諱福也

ちかくはまめの夕べもぐり出さずかくらむと  
の音は山をよる倍(ひ)夜(よ)  
をかにゆ(五)  
むすれにぎりより生(なま)れ  
まよふ長(なが)巻(まき)巻(まき)  
あやういゆ(四)  
はやうさんみせにゆきゆきあ風(かぜ)  
せこひきせせと薄(うす)い  
ゆきゆきよ思(おも)ひゆきよと  
事(こと)のと遇(あ)ゆ  
事(こと)のと遇(あ)ゆ

惠慶は山

卷之二

唐詩

文集林序

四

卷之三

以降はまたやがて本家の子孫のうち、山東を基盤とする  
お家が承りへ  
原作正

水集海道

卷之二

白河子山城之北也

伊豆の駿河川下に水を渡りて下りるに至る。

四



日

先後歌

秋のうらまきの衣日とかひのひまう三毛少れ  
永文元年七月忠隆家家合家承

草原あらわ月

唐津二十七山のまめあらもくらさとくはれ  
素在三年住吉村元の権富お家 嘉

辛丑は柳

時雨すらまめあらゆきもせうだそしの山の

深藏故内侍<sub>伊古</sub>墓元懐而

立便か爲

山官袖のまめあらむじとすらまめあ  
後竹林寺入向白毫有白毫

後家相模段

日山の杜下りたまむらに転轍風まきあら<sub>伊古</sub>舞

玄集

西行人

若葉門寺叶のまめあら御胸<sub>伊古</sub>とまつて

浦ノ

日山のまめあらあまほんばせあら<sub>伊古</sub>舞

光孝院高邦

日山のまめあらあまほんばせあら<sub>伊古</sub>舞

安養院高齋

やまもんくのまめあら秋のまくまちあら<sub>伊古</sub>舞

日

信光

家事をぬきお手の外れりの風情  
月  
後二位頭代頼

四

後二位頭銜

おまきのきたの事にからくちづけをうなぐ  
衣集め事中 正三位吉良  
足とまわらて火打前日ひこぢり事は森  
口事通としめ 家長の内  
あやつておもひだすが うかうかとおもひだすが  
庄保三年四月十日  
人をかむらむとておまきと三月に おもひだすが  
田原吉良家  
金

卷之三

卷之三

卷之三

後漢書

千金百病方

法鵠頭解

白居易  
自詠  
白香山集

後漢書

貞祐二年六月五日

頭仲子之方往者祀合紅紫之色

原序

乃引其子之子也。故曰：「子孫之子也。」

卷之三

同文合刻

袖底猶馳仲

まやややわらかむ黒き竹の月夜も連  
香草下まく  
安喜門院下屋  
其落次の事より是日はすまへひに  
くわくわくとあさりとよしして行  
ゆきはまされ年才とくに屋を  
うそお年才とくに屋をあら山を  
にまくらとくに屋をあら山を  
とくに  
某方云は福寺を今家  
子作は節  
明月は山家をのぞくはせよとて  
同  
龍虎がけまつるはまくとくもじは  
枝を法師  
未入界の原入るを望む事すくわ  
中院入るよしと  
れどもいとむのむきのむかはれ  
紅葉も當  
いと山家をなむかせくわと  
衣集の景と  
後頼朝と

某年三月法福寺主白居易

朝日は生れぬとおもひの夕くは暮よしやう

同上

のタクナギ  
枝を彷彿

未入軍の際からおまかであります

おもむくはのひのまづかへし  
紅葉すもぬ  
雪はゆふ  
山すみくらむせぐりと  
家事つまし  
後角國  
（三月古）

家集白系

後朝

國之有司者不以爲急也。故其後有司之奉行者，亦不以爲急也。故其後有司之奉行者，亦不以爲急也。

古集抄

四

爲りて於の風をまつてしはく嘗めれ  
建保四年家六首詩合故にか事

光明寺寺人吉政

猶もよみがへる放哉の景いま秋月もん

宝治二年百萬

光後御下

新緑古井下新緑古井下セシカナハシナリ

建治七年顯朝顯朝あすをうれむ事

信宣の如

陽城とほほにすら能ひてのぞきまつり

洞院高政衣百萬白多

考収事大なる大長

武里とまよ草をかじりて風吹ふれ秋月

後山藤田氏

みか跡の山の風もすりけの風も實もす

柿七百萬

同

わきとまよ草の風もすりけの風も實もす

有小百萬

後山藤田氏

お節よりとちねりしきの梢ゆきて秋月

建長八年百萬

前大印書顯朝

同

もとよし山の風もすりけの梢ゆきて秋月

古也中將源良

同

奇上き下葉山に登りしより外の山の事

仁安二年八月伊國家主令の事

朝吉

左中年為記

卯山の事也其の後又

洞院行政家万方の事

あり山の事也其の後又

内裏佛脣朝見紅葉

前中納言家家

わ景之が後すまう卯山の事也其の後又

建保四年百弓

同

又は日も又はまた其の後又

えたか

日 長月の事也其の後又

貞應元年三月の事也其の後又

信實印

日 有川の事也其の後又

平生安麻久も能多由人禮

安九月

者

六步題

今日本多の事也其の後又

建長三年十月初行活白葉

前中納言家家

実吉

玉子の事也其の後又

者

の秋日山方からとづけられた事耳

來集山にて白糸

隆祐御前

秋の月はかくわざり山をもむるの里の風也  
秋日山方よりとづけられた事耳

百翁之神山

藤原伊房頭

も向すらむらもあらまか山にアヒ神をもんがよ

白糸川

後醍醐院大御言御侍

村時多ろたんくとすまうり

周防内侍

稻荷行幸時

後賴朝

あらの山に白糸とある山に白糸とある山に  
此子いたるの山と山のあらの山  
けりてよなまとおでまわきとえよ

とくとく

建長八年百翁之神

衣笠因定

まめのひすれあせうめくまくはあらの山と

大原山周防内侍のいとくさう

藤原伊家

秋吉神武

まめのひすれあせうめくまくはあらの山と

周防内侍

木のしのぶゆてあらとめく散歩柄うち山

中幼言内侍

皇

たまごの山とめく散歩柄うち山とめく散歩

光明寺存政表六房之合放て白糸

方版



五  
平

もみすち障子門に月をうぐい宿の風を

月

月

秋の月

あいづけゆゑすだうかき山の木のとくせせら  
月  
十五日  
長テ

月

多  
豊  
吉  
守  
良  
永  
松  
毛  
和  
禮  
重  
久  
政  
里  
久  
流  
末  
知  
里  
許  
須  
余  
由  
未  
新  
宮

あさらしきだらうまやま  
月  
三  
日  
暮秋

建保元年而寫

前中納言主事

ひましますがの有教院  
月  
二  
月  
三  
月

開居白毛

草木は水をかきまつて生むるはるかの朝  
月

くわくすまめくは草木をよむるも

月

せんじゆくあらうてくは草木をよむるも  
月  
建久の年大和守官幸元

ひめもじゆくあらうてくは草木をよむるも  
月  
景  
一  
字  
大  
和  
守  
官  
幸  
元

アリたしのれいゆくと咲むをなれせいかうゑ  
月  
集  
書  
抄

朗詠  
秋節官漏の長空  
隨處而作  
而得因而在書  
舊而實際

西原山中皆是之也。北軍の事は内に能

六帖題

水星因下

すのよと秋の事がわかぬ事にはあらず也。

日

日

身の身の節の事。たゞありすまつても。前

連長三云鳥羽殿十弓。今合草花露

日

十日後と日の夜の事。あけはゆく秋意院

六帖題

先後印

いと生の物をとどめあるから。それられ。我へて有事

新稿合抄

六面書三合号也。大和子有事。

すの月。日。の事。と。月。の事。と。月。の事。

同

佐橋鶴船

日

前大和子。義宗也。

と。且。おののアヤシミの。あそ。秋の。あそ。見。す。あ。

建仁元年九月。春秋月。

志願味也

方。おのね。お。ソ。ア。ソ。ア。ソ。ア。ソ。ア。ソ。ア。

正治二年。百弓

日

暮の。お。植。月。が。す。山。風。海。す。入。の。雲。

秋。ひ。う。牛

日

草木

清集

後文爾書寺落成

木庭玉里  
主書

現 ひだり みかみ とくわづれ まうた せん せん

建仁元年十一月日記

前半御書空寂

いまとくわづれのまきにあきらめじとくわづれの肩  
建仁三年後月内裏空合を屏す

内

秋の半節の付あれくろしまとほゆせの風  
あえ三年仙洞三月 前半御書為意

花のそよぐ音が空葉の音はまつやまほまけむ

百首二奇

順酒を以製

うき石原の音と重音もつまうらきお家  
正治二年百首

二度既に

杜律 桂の古草もふく柄すましゆじのま

上山田をともねむて せらと竹よそと用くとけく  
見なきよは時聲宣一  
才とおもむきと見三毛を大加意の手合

里が長官集

せ中とよたて風よしと音め枝よし桺の聲

三百六十首中

被宣和

と月のまのくふとくちの節のう庚辰後  
旅鷗村深林別辟

千金

れでれおきかね、秋も友よくかまくらむ  
寒鳥飛覓

見出深

月此處よしとありせり秋と風と月と深  
氣あつえ秋もかする

月

讀人ノヘ

日暮山中月夜のあまとあかしよまのりとお

月スイ 同タモト

内ナカニ 故コトハシ いはのよまヨマシ しとす 手ハンド ひよこてゆまん

ああ郷家カミカミ ああ又峯アツマツ 建白助景タケヒロシ 曹カウ

家長郎ト

ああ代物タダモノ のうとく内ナカニ 峰アツマツ にのれむ夢ユメ なれ

見屋龜ミヤツクニ 事モノ うるそウルソ うるそウルソ 蓼リ 作ワカ

山ヤマ あとアト 月ヅキ あとアト あきまきアキマキ かのじゆ

## 九自畫

區赤拂時因東山房以

寫之

わきまつたわれとまくは就アサフ ふみだりと我ガ わ

正マサニ 晴ハタハタ 時ヒメ 力カツ 異ハラハラ 不ハナハナ 有ハサハサ

月ヅキ

めぐれぬまの故コトハシ あらう哉カタマリ あらう哉カタマリ あらう哉カタマリ

古葉コノハ

朝アサフ あとかさゆうやまとあよほし山アシハシ あまめ秋アキ ものぞ

衣アラハ 其カミ 衣アラハ 中ミ 恵エ 度ド 房ムカシ

朗詠ランギン 風カク 月ヅキ 順スイ

賀ハ 舞マツ 雨ウ 雪セキ 客カモ

以ハ 枝ハシ 舞マツ 大オ 庭テ

舞マツ 王ウ 月ヅキ 舞マツ 舞マツ

提ハシ 舞マツ 風カク 身ヒメ 月ヅキ 不ハナハナ 帆ハタハタ

命ムカシ

中助言 国信

父本多喜也子之曰下  
百萬三

定<sup>蓮</sup>後歸

其子之曰也子之曰下  
正治二年百萬

正三月後<sup>蓮</sup>來

歸其子之也子之曰下  
正三月後<sup>蓮</sup>來

其子之曰也子之曰下  
正三月後<sup>蓮</sup>來

其子之曰也子之曰下  
正三月後<sup>蓮</sup>來

其子之曰也子之曰下  
正三月後<sup>蓮</sup>來

其子之曰也子之曰下  
正三月後<sup>蓮</sup>來

其子之曰也子之曰下  
正三月後<sup>蓮</sup>來

其子之曰也子之曰下  
正三月後<sup>蓮</sup>來

順國院古製

其子之曰也子之曰下  
正三月後<sup>蓮</sup>來

文永四年九月合有書

文永四年九月合有書

先後歌ト

かねむら

旅の年よりうきわの草花にゆき水とて  
百首ニ多情秋

すくもよしとまつやせりと見けり  
建長八年百首ニ

信重印ト

うせがひまくと暮れをさへせし物事  
千方者子同 後高松相談  
三十六歳のまへせよと計はせむ  
久安百首  
あたゆて随筆

百首師可

慈鎮和尚

徳と久きいき草花根用子あひづくに

二首  
長歌三百首  
秋元元吉

大書  
卷之三  
西漢  
史記  
漢書  
後漢書  
晉書  
宋書  
南齊書  
梁書  
陳書  
北齊書  
北周書  
隋書  
唐書  
五代史  
宋史  
元史  
明史  
清史

列傳  
卷之三  
西漢  
史記  
漢書  
後漢書  
晉書  
宋書  
南齊書  
梁書  
陳書  
北齊書  
北周書  
隋書  
唐書  
五代史  
宋史  
元史  
明史  
清史

末木和寄、わ生半十六

冬部一題

初冬 時雨 唐葉 残菊  
神宵 父精衣 父霧 杖鈴  
霜 父雨 父夜 今衣 細代  
父難 父風 父月 父風 父月

衾

初冬

正治二年正月

父精衣の父夜の父夜の父月の父月

十五日前後

月

内の事より、もと様の本としれども、買ひて

前半袖を重ね

父精衣の父夜の父月の父月

霜月の父月

父精衣の父夜の父月の父月

同哥合判馬三

後鳥羽院馬三

古事記をさむひなう日本行て、唐葉、唐葉、唐葉

百首集二

順應院御製

身の草木衣食を今神にせよかに

同

月

解の鳥<sup>同</sup>日<sup>同</sup>とき節<sup>同</sup>と人  
朝鳥<sup>同</sup>山<sup>同</sup>風<sup>同</sup>節<sup>同</sup>と人

正治二年百首集二

後鳥<sup>同</sup>院御製

解の鳥<sup>同</sup>日<sup>同</sup>とき節<sup>同</sup>と人

同

源師充

霜の落葉<sup>同</sup>あすはや枝の黒<sup>同</sup>と人

家五十首

喜多院入道<sup>同</sup>新

山の賊<sup>同</sup>ひきひきとすりぬけ<sup>同</sup>

同

前大納言兼宗<sup>同</sup>

賀茂社百首御哥 惠鎮和尚

秋が<sup>同</sup>りて<sup>同</sup>まき<sup>同</sup>はるか<sup>同</sup>はるか<sup>同</sup>

五百首集二

奴<sup>同</sup>行役

落葉<sup>同</sup>の吹枝<sup>同</sup>落葉<sup>同</sup>の吹枝<sup>同</sup>

柳本顯供百首

後九條内大臣

夕<sup>同</sup>物<sup>同</sup>方<sup>同</sup>かわい<sup>同</sup>かわい<sup>同</sup>の<sup>同</sup>

百首二

あいさみ<sup>同</sup>うとう<sup>同</sup>うとう<sup>同</sup>本<sup>同</sup>もひ<sup>同</sup>而<sup>同</sup>行

文治六年立社百首初冬

皇太后官大史<sup>同</sup>

山有ノ木植の木をばかくすむと玉翁

本懐百翁

月

えあれ節度すとあらわくやひくもわざひれ  
ひじる年一百石う あまゆきをまわく  
まくはりのひがまきわどじよせとて、そはきさん  
西治三年七月ましむしきうねた

月

井上にいへ日暮のまめに岩の音にすまんと  
みや草年角口一弓中初矢

西院さんあ

みじにまみらむとわくと時局とあくわまき  
あ集物の十石う 未識なれ

日 あらわくやひくもわざひれとまくはりのひがまき  
一百石を初矢 あまゆきをまわく  
高麗うとせあじとくゆの枝のひまく

月

三月せぐをひきわくと王の月と事う  
五石をまつとすとひまくとくと明あくとまくはり

千五百石を合

月

わまゆきをひきわくと高麗うとまくはり  
建長八年七月を合

四

月

四月とすとすとすとすとすとすとすとすと

古事記傳集

今りそは四時社の計月、にじよしのうよりいん  
院院時百首物名

中山國作  
中山國作

隆源法師  
冬春くはれをひくはれのまくがく神のえ

時雨

建保四年山裏十首哥合

順法院口製

玉巻文

神育山風すみ村雨り父さきふらむ家れ

同五年即山裏七首三首合冬ノメ様

同

山裏東山風すみ山風すみ山裏冬ノメ白雲  
和琴所三首三首合唐山立

大藏卿有事

是風也山風也萬葉風也山風也山風也  
山風也山風也山風也山風也山風也

牛首山院口製

新刊上

元刊元

新刊

元

高麗

見方

古事記言

古事記言

代

建月事とし  
雪葉 宇治殿と同雨聲簡便とす

三高

落葉在風

角所叶雨葉とす  
題不知

牛移

度是起瓦  
不外有山中村  
國交時あひよ

後惠法師

日ととある事  
衣集多立年明内雨

後二位夜露

自もう生の事あまめかさむし冬也風

宝治三年夏初冬也

信文印下

象善とばく  
而頃平十有二年

松久喜

は今前此今少く時雨ありま枝葉も

お葉神音の事

原有任

雪葉とく山風の事の事

不外有山中村

後鳥羽院雪葉

冬夜月つれ村をすゆく事葉音

小御承百萬沙え  
小御承百萬沙え

あらかじとみ  
あらかじとみ

十五首第五回

前大國主忠良

山川水木樹草木の聲萬葉の雨露の白雲  
衣冠の山

角の音とす

鳥類の音

あはれ

帝御の御

十七の時角の音とす白雲の音は是の音を  
あはれ合はば

内

風の音とす

君に沙汰合

而中沙汰の事

候の時角の音とす

風の音とす

君に沙汰合

角の音とす

風の音とす

君に沙汰合

角の音とす

風の音とす

君に沙汰合

六帖題三回

中榜之屋舍

五帖題三回

中榜之屋舍

神音角の音とす

中榜之屋舍

四帖題三回

中榜之屋舍

三帖題三回

中榜之屋舍

二帖題三回

中榜之屋舍

一帖題三回

中榜之屋舍

十五首第五回

第三部五

十六首第五回

第三部五

十七首第五回

第三部五

内

參議行記

夫若幸有余合

立憲和局

内事  
城の院内時雨  
降理にまつま  
事には時雨と被ふるうひをもつてす  
身不知

漢人を知

えよあらまめかばれ  
内事をもつてす

人也

時雨而また事あつまの事あつむくは  
文大正年十月内事をもつてす

権中御言師後

まくはまやのまきナヤシオウカタリ

附書の事とて後頼れ  
附書の事とて後頼れ  
衣集と時雨と

甚後

時雨と時雨と時雨と時雨とすまくは  
衣集と時雨と時雨と時雨とすまくは

権中御言師後

深山の事とては時雨と時雨と時雨と

衣集

時雨と時雨と時雨と時雨とすまくは

旅の事とては時雨と時雨と時雨と

東京の事とては時雨と時雨と時雨と

長三佐和政

内院中本の事に爲りてありとども  
家事日めあつて お母子御有  
自海の陽の向ふにあはれりてすま  
建保二年夏四月

アリの内院の原 じとくはあてほんたすす  
に坐えどもうけじとくはんね  
内 次

省され。またと内子外す事あるをさす  
十五面看手合 繁慎和尚

行ひ松生山としとくはあてほんたすす  
内院正時事 あゆ望月序

唐脚あらそとたのとすはれのれよきく  
上百万馬力 俊昌内院御製  
龍馬の時角の事在候所とぞれ 宝篋  
百子ゆゑ 日

神皇御坐としよりとくはあてほんたすす  
深山の時事とぞれ 松井りおとくはんね  
又山中すすき事文六條御主御

自殺をもととる事のとぞれよとしおとせ

内院

内院中軒端前とぞれ 时角とぞれ 佐喜風

十五面看手合

内

シテ一とぞれ おとせとぞれ 佐喜風内院

内院

支承七言每句一首

因都之有也

かのうのまほくひのじゆも、新てこのくわゆ  
墨屋入ひたす良衣百布中にはする

日

大井川右へ出でますに、山あいの下

付きけらる

晴空は静

一時車また色しむ三景のまつは、右たぐり

新緑難上  
原布五集

船室部

かのうのまほくひのじゆも、みまくすく風まづれ  
共すを草す、屏風よ馬よのふくひとづらに  
けものともいゆどきくわすうすとぞくとく

落葉

白若竹百布ひう

益恵和局

木の葉、よしまたくわすく、内室をとせ風

山あそ年百布良葉

舟部アカホ

今うの葉もうち名はひのう、波もくもくもくとく  
舟のふうねんの波とく本ほんをうえに山とく

日

教はまどあじよれ、まどあじよれをまくらひかく  
まのふうねんの波とく本ほんをうえに山とく

支承三年正月二日

今事すくまつ  
えだらうじまつ  
主に海をかきたりのひが草子アラハナ

主事すくまつ  
えだらうじまつ  
主に海をかきたりのひが草子アラハナ

あえ、年百萬唐葉

奈浦高翁

竹林の葉も秋下にありてより吹き去るを生む

目前落葉

月

散り葉を此處の風の吹き下す所すら山

家集落葉と

西行

角吹を此處の風の吹き下す所すら山

三百草子中

也思

吹き下す所すら山の風の吹き下す所すら山

久集早

也思

玉露あくちもをほとこり落葉を吹き下す所すら山

六郎六七

也思

さまさん

友氣永郎

石舟引ひし葉もひそむ若くもちよちのとも

草元

也思

さほほとつまんでまくやまくはる葉がて

後走はゆ

首走いよ山の舞はんちゆまうりやうり

文三

設局院

水木内わらじ大井川みちとしまくはるの白糸

池上高葉

也思

玉もすらうてはらうゆせよゆうらへ行きたまう

あえこ年百萬唐葉

也思

奈浦高翁

也思

かまくらとせんじの間をうなづくと、白い風が吹いていた。

建保三至七新百首

東山記

奇にすまの無事にあつた  
多喜之助

七

修定本

卷之三

乙  
後三國風字

91

於宋之年一百有二  
後漢隱因之

丁巳年夏月  
李可染

卷之三

わまくまくはいふにゆきよしむはは

西漢書

まことに、何うござりやうござり、富士山の事さうぢ  
平五郎吉宗の、あらわす事多矣。

宣の如きあらへ  
ふるはるのまへ

卷之三

卷之三

萬葉集卷之三  
仁和二年正月廿二日林邑人

友實原亮降那

有馬山の風吹せと斗三の原東の景

内

貢度改平

水とよあらじしのくは年降へまき生すい  
安元三年十月吉日あす金葉本並年  
嘉祐四年正月三日よりはれやきはくあり  
保延元年正月降て表す金葉

友實原亮報

詔

本稿はひそり吉節内れ承わらぬ御のせ  
佛果之三事  
吉節内れ承そす御のせ山下角をひ  
久支百萬

友實原亮報

詔

正治二年正月  
小侍臣  
家集多事中  
信明お下

内

那鳥のけのそく承る教へ承る古跡  
家集多事終辞

詔

那鳥のけのそく承る教へ承る古跡  
家集多事終辭

内

賴情卿家多事終辭

詔

前大納言師仲卿

詔

家集深山落葉  
槿大訥言實家

紅葉の季節に、しやかの風の匂ひをもたらす

七

四方の事は  
此等韻序百首、都門踏僻  
元  
萬葉集本版

猶云慶耶計也

草子才もひのよろづやのうじよを  
久三年大高安も里に在り一高  
萬中和吉良家本わら草子もくじ  
心事に心事に

2

陳公之子也。公之子曰公  
建長八年丙寅夏月復山隱居

三

本居宣長の書道  
農事詩合 寒村文苑

後漢書

和漢方のと  
シカク本草

は爲ては身にうすに本家がわねの間に  
六畳間で、家主は即ち  
時事の事よりうそをいふ風と云ふ事ある

正德三年夏首  
同

吹きの本の音ひづきがよしむは  
拂集文と音序  
後言夜行以

東方朔

大王寺百石

その御やまより仰せたむえよ

六百卷三万卷本

前中御言室家

内行しきるもれりを成るもくの精のまつ

月

後二位也降

本山もとよまはるかの内神

生立林もとよまはるかの

月

わざの年ねまほとひの内神

生立林もとよまはるかの

建保八年四月裏十日

西園寺入道大院

山の内神

王代よりう日

十五百卷三万

慈氏院

身の内神

身の内神

衣寺也野寺家

高田御室主

山の内神

王代よりう日

十五百卷三万

慈氏院

身の内神

王代よりう日

十五百卷三万

慈氏院

時雨ノ名傳本山ノ合意  
安元二年十月十五日家主合意

安元年十月十五日家子合家書  
情浦

情、情、氣、

立身の仕事は本の比類なし才あるのみの事  
建保五年四月三日立身

卷之三

火を盛りてよ。又龍田川以東の山の頃の本也  
而亦馬事  
豪傑也

本居宣長著　山風集  
建保元年正月  
大日本圖書出版社

風景の如きは、實に心地よいものだ。

同

卷之三

卷一百一

自是其橫戶外風一夕大作吹之不休

あ頃二年十方三合付多と

如御は歸

新松元  
寺主也やまゆらもあそくもひきまよゆく所られ

伊良

後後ちますとて

國見り相りめりせよれぢわらうと本家傳り

光明寺寺入方有田家者

章算入方正三

内の音うすてはあまゆらもタ生もかじく貢が事よ

建保三年名前而有

は算りあらざるの事もあらずす生ももりえき

同

正三度表附

表裏文

久うるは算り同のあらし併ト本のらだむ

同五年内裏セ有三合付多と

精工細言多信

是月付山、まちりまつてまちりにのこえられ

五百石番三合

後ノ成段

まくは生のこし出音宿ありましにそのまく

日

内もち生手かとてあらまよすすりも多事多

日

奥山、右け火火と手と脚と足根、右足、左足を  
建保二年有三合衣足内右

脚吹しのうとて川口風、えりに引拂

医家集

卷之院山製

久古に在りかまひ波多美下がく本に來るす  
衣集山居落葉 布屋外野者  
さよひ跡とやうてわまくはりすをせんちあ  
百首三  
光風おと  
あたてみのうすゆうれい 本代  
新後古六度  
前古初言良年  
はくもむらのくせん山風  
はくもむらのくせん山風

## 残菊

家集院山製

菊之

秋月菊に生れ月時を経て深き

延祐十三年十月印裏菊

皇則

菊之又かかく御おとせましもくわめ  
内

行恒

余誠伊衝

初時菊に生れ月時を経て深き  
内

余誠伊衝

草木ノ花萬葉  
永祐八年五月印裏泰憲卿三井寺三合  
残菊

讀人

育ちの花萬葉  
元祐元年十月印裏泰憲卿三井寺三合  
残菊

權中幼言印後

露草すまやあれどすがまむれたえでやまくわうひ

月

源雅光

霜れれけとまよき菊にうる空ともむきは

月

友重基

愁きくらむの歌のこふといじくらうあうか

月高柳云

順風院御製

久事もむだとみましとお菊てとまよしと豈か

六首詩合後菊

ねまね存取

さくまくと菊もむかくまよきにまよあらわ

月

有中助言主家

きく菊をまのうえくわくまよいめくみはれ

月

正三位院家

降すまきく菊のしきびこみうりう、夜もみゆ  
月

正三位院

かくと菊をまよくめくれそれひまくまよくまく  
月

ま橘頭服

あまきくあむくまよくまよくまよくまよくまよく  
月

益田味高

草がく霜月せまくやく菊もとく神よみのまよく  
月

降信相

くまよくまよくまよくまよくまよくまよくまよく  
月

安達ほ祐

一枝はく月の神よく菊は匂いますとまくはれ  
月

草がく方難云殊べとく唐手まともむれ

久留ひひまくとせひえたり身うつる  
えれいはれたり 判ち右手きの匂

かくまほへて残菊の匂ひもひまく  
ひまくはるやとせしもよまよあね白菊  
さうじとじまくわふらんとまくまく  
レシテ自うけいをばすむなうて

四葉白菊

並肩かう

白菊のあしたれをもむかす雪代指ゆきゆき山

正月二年百萬

或由内初望

しほきおうはくれ白菊のまくはくはく初夢

霜月のあくまくあくまくにいのうめのうめ

日

前半幼き童女

まく菊

けすりはく鳥羽院桂柳玉まくせむけ時新  
官三省侍奉玉庭とく菊とく事とく家集

日

じこくはく御とく御とく御とく御とく御とく  
父系四十七有三 日

蝶のやまきとくあくはく白菊のまく菊

神廿月

文天寧每月一月中

天寧

神廿月下まくねりとくとくじくまく菊  
文集百有十有十有十有菊大氣好ア情景似

春在

前中納言定家

昔は文とや時とされし車の苦難と多矣  
は呂は早てる。月

立候ふるも事はす。たるまくはす。すう日有れ  
祇園社百方時雨。皇太后をすま後風。

御前時あすめと久行。是事にかとすれども

正治二年夏

後二位宿降

むとまき音も十度。はなはだよみ月れ  
千上石音。後鳥羽院。又内

御前ノ音。下ノ音。あそり。そし。仲間。は  
家有る。民都つみを

御前。あま。府。あが。ま。御時。も。事。む。事。

家集十月。あま。御日。は。ま。御時。も。事。む。事。

文治四年。冬。月。晦。日。と。之。月。と。之。年。

臣アマヌ求

六七題

信実。私。ト

わ。あ。ま。事。の。ま。と。く。ら。か。と。せ。月。と。か。い

火。持。衣

天に三年仰頬御家

友故隆

事。有。月。と。火。と。夜。と。衣。と。さ。う。り

胡床。百。萬。冬。國。寒。事。多。好。可。憐。相。好。歎

民都。字。の。也。添。緒。也。

おもひてお供ひしにきまつらひのまへ  
あれ四年是忽百萬冬う

高良家臣

衣食人にはうそしとあうじゆうをす

久霧

阿院寺時百萬えう下年一合

友琴流

さうだらけの内みぬくはよやねまほ  
達保四年内裏十萬三千合

後三佐支流

朝りたまはれ暮れなむとひのまほまほ

正和二年毎日一萬中

馬部のまほ

南山すとどち川すれやまはくはく  
正和二年正月一萬中

日

船を移すまほはほの上に船をひせば正和

二年正月七社百萬円

朝りたまはれ暮れなむとひのまほまほ  
庚寅二年毎日一萬中

日

荷のあらわしと移すまほはとひのまほ

元院入るにあらわしと移すまほはとひのまほ

後序

あくまでかのじゆくの鳥鳴寺

補訂欽定古今圖書集成

かくのう

卷之三

枯  
楚

卷之三

五  
ひのきの木を引ひきしめつゝせ  
音書三ノ木原  
後ニ佐多屋  
席はまじりにゆく  
おおきな木原  
五箇の木原

六言者之古今存者

後二年  
乾隆

大藏之有家

後の事は御用事一の事にてお仕事  
内  
前大仰言意亦

卷之二

正三位季序

新井柳風の筆を以て之を記す  
唐の詩人白居易の「新井草堂記」

文治三年夏月

おおきいおもてのえは一ひきうちやまとす

民部之子

新編の草書行

正治二年百萬石後鳥羽院馬刺

すじ至ひはくをかくもむかう重光の原

百萬石

順法院馬刺

吹内

老若九十万石合

あ大仰忠良

さかの草之原十萬石合

後三位行能

高木

まつれあらわ

先保

日

信實

久里山やまくらとみよし草のくわ

霜

家集立手は

伊勢

すくとくに合あひてしてかくもむかう

家集

此正山やまくらとみよし草のくわ

家集

あらわしゆかくもむかう

西河人

此正山あらわしゆかくもむかう

海道ノリニテシテ之又かうシテ前半は御身ノハ

半之元ノ石ノタマリ大行ノ御ノトセ小行ノア

之ノモニハシシレ

舊川院萬時ノ有ス有ス

前半仰言シ實シ

名前成シシキナカツル武ノ出シテ止ムシテ之ノ也シ

建保三年ノ所ノ有ス

正三位高宣シ

夕ノ月ノ星ノ也シアガツシテ大行ノ御ノシテ之ノ也シ

夕ノニテ生ス

既正御下シ

又ノもシシシ武ノ是シアガツシテ大行ノ御ノシテ之ノ也シ

正治三年ノ有ス

前半仰言シ實シ

之ノ半ノアサヒシのシニテ之ノ也シ山ノ有ス有ス之ノ也シ

衣集キヨウシ

吉野音書

お由ノ仰シトシ方ノ

火ノあク火ノ武ノ南シえテ之ノ也シ御ノ多シ也シ

百行平ノ也シあシトシ位ノ二位ノ高隆ノ

又ノ夜ノ月ノ也シ御ノ多シ也シ之ノ也シ

千上シ百シ音ノ合シ

系シ御ノ御ノ也シ

又ノ日ノ月ノ也シ御ノ多シ也シ之ノ也シ

文治五年ノ社ノ有ス

後後ノ年ノ也シ

皇大ノ后ノ主ノ事ノ後ノ後ノ也シ

長久三年ノ百行平ノ字ノ前中ノ也シ

御ノ御ノ也シ之ノ也シ小シ煙シ也シ之ノ也シ山シ

達人ノ百行ノ

内シ

新之卷  
年號  
元祐

元祐元年

元祐二年

元祐三年

元祐四年

元祐五年

元祐六年

元祐七年

元祐八年

元祐九年

元祐十年

元祐十一年

元祐十二年

元祐十三年

元祐十四年

元祐

元祐十五年

元祐十六年

元祐十七年

元祐十八年

元祐十九年

元祐二十年

元祐二十一年

元祐二十二年

元祐二十三年

元祐二十四年

元祐二十五年

元祐

元祐二十六年

元祐二十七年

正三位家序

大東くじまの事事多引難くとて猶幸能  
達保三年家百有三月既酉

先明者寺入乃有故

源蔵の山の山人をあふれりにあらはす  
可

信重部

そひのうあらは因とてわざわざ神むすめをも  
正保五年春一月

田部之方家

白川村主はあらはるまよはまよはまよは  
文永五年春一月十日

田

之御事あらはるまよはまよはまよは  
高野也光後部

好樂

之御事あらはるまよはまよはまよは  
高野也光後部

前半印言宣主

寒草

日告社十五番三合

後京和持以

牛を山の邊廻原を走る風景を今風と云  
建仁元年十月三合前吹之草

小原家  
皇太子居士集  
三百六十字

如事

仰天也降はしのうひを鳴らすも

五百首三句

大和子有家

おまきすよ師の身たゞれどもよしめよよ

來集文

西行人

すまむにとせらむもくわくあととくとく

家集寒草立

源仲

吉妹よ<sup>ア</sup>あひせとえよきみよだすまくあひゆ

承久元年十月三日

讀人

翁のまかづりひまかひうひたうほまざれ

百翁

後鳥羽院

あねくわくじりへくらふまくわくわくわく

六百首古今和歌

前半幼言

秋音

は時寺方前園

やまくわくよくわくよくわくよくわくよく

山家

吉田親王仲仁

くまくわくよくわくよくわくよくわくよく

六古錄

卷之六

吹風のよしすまへとおひにけりとせ

月

木

日

後葉集

吹風のよしすまへとおひにけりとせ

冬至申

信實引

垣外の草はいはくすすめのそよぎ

建仁二年新正子合内吹雪草

風歌之乾光

無事の風歌之月夜の壁風歌風

建保四年四月十日

隆院之舍

旅衣十日歸れむをもとめの音をうき

家集野裡寒草

後頼朝

文治元年立秋萬葉 皇居后方右馬廻  
垣外の草はいはくすすめのそよぎ

前六二、もとま、六节題

先後歌

まじててのたじやくすすめのそよぎ

和政元年正月之予

宮内侍

たのちやくすすめのそよぎ

家集

馬部之子あら

えす柱の風が根すすめのそよぎ

子房予

月

久未くい難波市ひよみ行せまくし事なほ

八五

内

月

而れれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ

家集之三事

二席院漢役

新之助

難波ノアキトノ事あらき十枚舟あは連子

正保三年百三

前工加賀隆房

木の向山や向山がくましくじめくわくわくの年  
家集といつらととら後引取  
うらの可いづくひゆけめくわくわくわくの年  
家集のうらひゆけめくわくわくわく

四人

あきてりそなむの年あくひだくひの福  
而事御言室家

「おまえは不手足の事無とくに」西毛の岸

情浦

元

章四

久元山也岸もよもよもよもよもよもよもよもよも

廿五年正月重家以てあひ合せ四日

寒天

建長八年百三合

信實

今みる處の下すましめくにあくと前風乞

日

良の計事事のあくと前風乞

此元比判者行安卿もとめのまけんとけん

もとめりてまじとけんとけんとけんとけんとけん

とけんとけんとけんとけんとけんとけんとけん

宝治二年百萬字草 衣笠内大臣

萬葉の文書が何處か見付からぬ

## 火風

匡衣三事宣文書合封而之風

淡人、嘉

而ひき合ひてはゆる音、雨やえでらむもじ  
裸子内大臣を表する、或ア  
物のあすみとて鳥の小火ノ火をもゆき

三百六十萬字

如也

ほしよひまめの火、ひやし井戸をわかまくろ  
火野まつりの火、ひやし井戸をわかまくろ

六百首三合推定 ちゑて有表

久きうき可れ月あそびの月

卒上韻三合連顧角中 逃きと傍

帝は御言宣家

室へて夕日は山陰をうなづく金いの宿  
立石興み月

立信一木屋のこねえふねねにあらひ

正治二年百萬

陸信和火

火と火としゆまをすたゞ月永もしくて火

音信火

火まきまきゆ火いきまくはれまくはれ風

五行口火小

後事在行取

三月ノ内ノ所用事は多々有りやもしくあつて勿れ  
建保五年内裏十肩手合

光明寺寺入内院  
寺もすりき風築き磚瓦は日本中皆此を有りえ  
古河殿之内  
重慶院てある事也  
屋上に新めりまし御城と云ふ事もさき御城也  
題あ  
久の少子たるおうねをばう内院とてすき

平巻時郎下

火舟

三月ノ内ノ所用事は多々有りやもしくあつて勿れ  
建保五年内裏十肩手合

建保五年内裏三肩手合月

内裏用

は古

権大助言忠信

内裏用也やもとづくたゞもしれやもと是も  
先若丸十肩手合  
後重慶院

内裏用也やもとづくたゞもしれやもと是も

月

山本や内裏用也やもとづくたゞもしれやもと是も  
内裏用也  
内裏用也

順西院

日

前吉内裏用也内裏用也内裏用也  
宝治三年百肩手合

後之降肉食

日大少主前之月之日也  
永祿三年百有六日

臣邦之文家

承之至此草木之神也之此之月  
千有三

之未之本之素之以也之月之未之  
未之三月百有六日

奈藏内相

以也之未之未之未之未之未之未之  
正安五年内裏直方

前工助言入焉

之未之未之未之未之未之未之未之  
未之未之未之未之未之未之未之未之

家集冬有之未之未

霧行火

久之梅之未之未之未之未之未之未之  
正安二年百有

前工助言忠良

之未之未之未之未之未之未之未之  
未之未之未之未之未之未之未之未之

同

宜秋門院母

之未之未之未之未之未之未之未之  
未之未之未之未之未之未之未之未之

家集目前寒草前臣邦之雅有之

之未之未之未之未之未之未之未之  
未之未之未之未之未之未之未之未之

建長五年正月一月申之未之未之未

臣邦之文家

前之未之未之未之未之未之未之未之  
未之未之未之未之未之未之未之未之

卷之二

文獻

四

あに  
うき

本居宣長著　信良集  
明治三十一年正月  
大日本圖書出版社

四

信實錄

後編  
六

家事を手に取るのよがましにあたる  
事へ口宣ふ事より

信  
宋  
解  
說

三

神宮へ至りては萬葉の王の御代を承る。其の御代の月  
宝船云々有る。サ修内侍

文集古文子

卷之三

そめくまく風すと雪と事あつてはまづ  
家集五年そく  
五  
いすら白きよしの月夜のうららか  
久安三年十一月  
久安三年十一月  
久安三年十一月

あやしむが、おのれの身を  
正直に

四

酒中多有此種人也。自非其人，則不見其書。

橫山堂詩稿

臣等謹將  
所見各款  
開列于後

此ノ判者ハ陰入ト大相國ミたのヲシテ  
高モトサヘナム也。伊豆ニテモアリ  
シナリトテアリナリ。後シテシテモア  
リ也。トモ~~治~~ヨリ<sup>ハ</sup>アリナリ。其ノ其事等  
トシタ事ハシタニモアリ。彦少佐アリ  
モ、キリシマモアリモ、日ハセアリモ

鄧辰石詩

冬の夜はまだ暖かうとすまう  
ほんのあつたとてほんのちゆう  
やまとやの楚歌あつとも

## 冬雨

文政七年九月一月中

民部少輔家

冬の雨はまだ暖かうとすまう  
ほんのあつたとてほんのちゆう  
長三年九月一月中

日

冬の雨はまだ暖かうとすまう  
ほんのあつたとてほんのちゆう

## 文小五年九月一月中

日

冬の雨はまだ暖かうとすまう  
ほんのあつたとてほんのちゆう  
長久三年九月一月中

## 後二宿

都合よりやがて雨をあわせたときの事  
六帖題の雨

衣笠四月

三宿えりきくわざと雨とよどみとての雨

光復印下

さつきとせぬわざと雨とすら重ねしき

新之

## 冬夜

每目一言本

民部卿のまん

「おまえの父は、おまえの母の名  
久安昌房 皇太后宮大支院

皇太后之大冢院

三百五首

山うるはせの處のあつて用ひます今  
まねのあじきとくに及ばずにはゆうじがふる

志怪題

在御の上

今本

六百卷合

中書侍郎  
李少房

卷之三

卷之三

一  
一  
一

五  
六  
七  
八  
九  
十

卷之三

四

本多忠重の鳥居は伊勢守の筆也あ

四

卷之二

後漢書

吉田は倍  
方舟佐良

太上太公  
錦也

可西

題うか

内

古

元

長弓

山口博良

もくあらわあまくね ひきがうちかがまくわ あらと

永久墨面百萬金

仲宣郎

あせあせうせこへれうめんこすまくよまく

内

友忠房

またうむすと年事萬事かまくようりせんじくと

内

原義昌

達うるよ敷たうるやまうととくゆうそくまくと

古物題

衣笠内官

御家

神弓引うれめうどくとよわくねうがまふつれ

ノス百萬

前衆藏セシ長

もくせうるよあくとまわくうしとまくのミテ

人安ニ年二月頭浦つやうとく

足三月奉行

れいづひなものとくねうとく

保延え年八月あらわあまく合意

頬袖邪

もくまえ立めせうよううゆうめくまくまく

六角首三合金

後京極直政

わく夜とよとく食とがりうる神のうとくほじゆう

寛永二年十月入内内官周人立江鳥

光明書寺入内有政

枕抄子

花見外衣

鞍馬保志萬只用一錦假  
其底猶全幅而一枝客或被贈作二六告豐成様善之十望下品  
通狀兩側金錦則雅良及于肩此之謂舊金衣也現不誠大史之兒麻  
時日本國人腰袋山高僧於宋臣庫見之云々

次よすじよせ金子を貢ふとけ全あらはるまち

内

後三位お陰

ありぬよせゆとくのひがわらはまみやとくのゆ

## 綱代

山に因るに某時宇治のやうす

人れ

五三

廿六

山に因るに綱代あらまきよみのゆゑまきよ

日

五四

綱代

津人よ

人れ

五五

山に因るに綱代あらまきよみのゆゑまきよ

日

五六

綱代

津人よ

人れ

五六

山に因るに綱代あらまきよみのゆゑまきよ

日

五七

綱代

津人よ

人れ

五八

山に因るに綱代あらまきよみのゆゑまきよ

日

五九

綱代

津人よ

人れ

五九

山に因るに綱代あらまきよみのゆゑまきよ

日

六〇

綱代

津人よ

人れ

六〇

山に因るに綱代あらまきよみのゆゑまきよ

日

六一

綱代

津人よ

人れ

六一

山に因るに綱代あらまきよみのゆゑまきよ

日

六二

綱代

津人よ

人れ

六二

山に因るに綱代あらまきよみのゆゑまきよ

日

六三

綱代

津人よ

人れ

六三

山に因るに綱代あらまきよみのゆゑまきよ

日

六四

綱代

津人よ

人れ

六四

山に因るに綱代あらまきよみのゆゑまきよ

日

六五

綱代

津人よ

人れ

六五

山に因るに綱代あらまきよみのゆゑまきよ

日

六六

綱代

津人よ

人れ

六六

山に因るに綱代あらまきよみのゆゑまきよ

日

六七

綱代

津人よ

人れ

六七

山に因るに綱代あらまきよみのゆゑまきよ

日

六八

綱代

津人よ

人れ

六八

山に因るに綱代あらまきよみのゆゑまきよ

新  
元

建長七年頭頃あす千葉綱代

信實印

あまのせむらかみ川は御代をせむらのとくわざ  
支給を平五百万石 皇太后を至後嗣わ  
ひ前も支給味わふ身ともて次とくの日とえされ

卷之三

六  
而  
題

卷之三

卷之三

医事の本筋

後漢書

卷之二

四

少卿當事之日多矣有不以程子  
自命而以子雲後賴私門

未之見也

同人月半之日有小雨也  
家集之三月  
題作角弓

宋集之書

易傳

主に五百万 皇太后を大儀成  
たゞや主の御内閣を以て身のまことに

文選卷五十一

皇太后言太史後成  
三十五

所の事又生まぬとぞしかあり  
文應元年十一月有賀義成

卷之三

西漢書

風の吹く處の衣袖にひびくがまほ

文彦年百歳

前半身を

せやておもはき因縁あつたまく身を

遠久え年百歳

月

後身のくわくわらじとくすくとく

裸身初來十月庚申辰

寅

すとよすとすとすとすとすとすとすと

庚辰

川霧の立ぬる時、細代坐といひてゐる

美作

細代坐といひて白良の坐とさへいふ事なき

義家坐といひて細代

内

年百歳

以もあんれいとも身をうそりまくすと

宿題

衣裳而上肩

火をすすむの内が細代りとまゆにうす

正三位

家

仰りまよひ筋人見ゆといひあらじがねを  
いらす四代を

後細代

ひとよせはせをとせざるに石下せば身を

衣裳もとすとすとすとすとすとすとすと

西行上人

ゆきよよおとせよとせよとせよとせよとせよ

とせよとせよとせよとせよとせよとせよ

文藝言葉入角序

隆信相

わまちくすの御身の事は筆に記さず

内

えどかの御身は日月とて

かくまを

久難

吉集

和泉式部

五難ハシ  
ほんとせきをせしけのくふとすれ  
せうひそはあきらむる家よりきわみ  
おまのなりげすにしありけす

もひこゑ

三百二十

ね

おもひうたひふかうあはるわがよめ

新愁多侍夜長東

山里

あきしやうへあくまむるやうとけおりえ

家集都三

前半切て重持

おのれのもし三まじけにうつすよどりて

四半夏の夜

前半切て重持

よしらすおれを清夜もちのうのらを立

一字有

同

ほせれのまじてよま

あく

建保四年内裏

後二往行

宇治まで四の馬をわせとおとづれしもの

冬御事中  
壬午正月

戊子内親王

五  
櫻桃山の里風景  
西洞隱士百首  
後京極有致

秀吉が西洞隱士の筆を喜んでいた

萬葉集

桂子

收

60

